

口腔粘膜扁平苔癬の研究 -特に卵胞ホルモン治療について-

著者	丸茂 町子
号	3
学位授与番号	5
URL	http://hdl.handle.net/10097/35989

氏 名 (本籍) 丸 茂 町 子

学 位 の 種 類 歯 学 博 士

学 位 記 番 号 歯 第 5 号

学位授与年月日 昭 和 5 2 年 6 月 1 5 日

学位授与の要件 学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当

最 終 学 歴 昭 和 3 7 年 3 月

日本歯科大学卒業

学位論文題目 口腔粘膜扁平苔癬の研究
—特に卵胞ホルモン治療について—

(主 査)

論文審査委員 教授 林 進 武 教授 山 本 肇

教授 小 倉 保 己

論文内容要旨

口腔粘膜扁平苔癬の研究—特に卵胞ホルモン治療について

扁平苔癬は、皮膚および口腔粘膜に発現する慢性炎症性疾患といわれ、原因は、神経説、アレルギー説等諸説があるが、本態については解明されていない。本症は、難治性、再発性を示すが、有効な根治的治療法はないといわれている。

私は、1968年～1976年5月までの8年間に、東北大学歯学部口腔外科を訪れた口腔粘膜扁平苔癬の患者65例につき、臨床的および病理学的検索を試みた。

その結果、本症が40才～50才代の閉経期の女性に多く、自覚症状は、刺激痛、灼熱感、自発痛、粗造感等を訴え、しかも、この症状は、卵巣摘出後に発症又は、増悪した例を経験した。病理学的には上皮の不全角化症、顆粒層の存在、上皮の非薄化、基底細胞層の液状変性、基底膜の部分的消失、固有層のリンパ球を主とする帯状の細胞浸潤であった。

上記の臨床経験より、性腺内分泌機能の欠落あるいは低下との関連性の観点より、実験的に、卵巣摘出家兎および、それに Estrogen を投与した際の口腔粘膜の変化を経日的に観察した。結果は、卵巣摘出による Estrogen 欠乏状態の口腔粘膜変化は、主として、不全角化症、水平細胞配列の不規則性、表皮突起の不規則性であり、卵巣摘出 35～49 日後に認められた。Estrogen の投与により、角化傾向があらわれ、水平細胞配列の不規則性が改善された。

臨床的には、各種薬剤の他に、Estrogen の表皮細胞増殖作用は外用によっても得られ、2～3週で表皮の厚さを正常にすることが出来、しかも、全身的影響を最小限にすることが出来ることから、Estrogen 軟膏の局所塗布を試みた。その結果は、刺激痛、灼熱感、自発痛等の自覚症状の軽減、発赤の軽減等の症状の緩解が認められた。又、軽快病変における病理組織所見は、固有層の細胞浸潤の軽減、基底膜の明瞭化であった。

結論としては、扁平苔癬の治療については、根治的薬剤はなく、種々の薬剤の副作用を考慮しながら、適当な組合せで使用する外はないと思われたが、局所使用としての卵胞ホルモン軟膏は、適応をえらべば有効性が高かった。

審 査 結 果 要 旨

口腔粘膜扁平苔癬は極めて難治性の慢性経過をたどる疾患で、各種療法も無効である。びらんを生じると疼痛、灼熱感などのために長期間摂食が制限される。時に同処より癌発生をみることがあり、前癌状態に数える研究者もいる。

著者は65例の本症につき、臨床的及び病理組織学的に検討した結果、

1. 40～50才代の閉経期女性に多い。
2. 卵巣摘出術の既往が9例いる。
3. 卵巣摘出後、従前からの本症が急速に増悪した症例がある。
4. 病理組織学的に上皮の錯角化、萎縮、基底細胞層の液状変性、基底膜の部分的消失、固有層上部のリンパ球を主とする帯状の細胞浸潤を認める。

などを勘案して、本疾患と性腺内分泌機能の低下ないし欠落との関連性に着目し、以下の実験を行っている。

卵巣摘出家兎群および摘出時より Estrogen 2,000 u を連日皮下投与せる家兎群の口腔粘膜変化を、経日的に病理組織学的に観察した。35～49 日後の所見では、前者には上皮の錯角化傾向、水平胞配列の乱れ、上皮突起の不規則性を認めたが、Estrogen 投与群では変化は極めて軽微であり、角化傾向も認められた。

次いで著者は39例（男10、女29）に Estrogen 軟膏塗布療法を施行し、その効果を判定している。すなわち、1日量 Estrogen 約 2,500 u 含有軟膏を、1日2～3回塗布、長期連用せしめた。根治したものを著効、自覚症状の消失と他覚所見の軽減したものを有効、無効および来院中止を無効として判定している。その成績は著効4例（女4）、有効19例（男4、女15）、無効16例（男6、女10）である。特に閉経後の女性（14例）に著、有効例が多かった（11例）。

これら有効例の病理組織学的所見として、基底膜の明瞭化、固有層細胞浸潤の軽減を認めており、本療法の有効性を指摘している。

本症は補綴物その他による局所刺激を受けやすい部位に発症する例が多いが、一方、何らかの全身的要因が潜在し、それらの複雑な交錯の上に生じると考えられる。要因として細菌、ウイルス、アレルギー、中毒、神経、外傷、精神身体性など種々あげられているが、未だ病因、本態について解明されていない。著者は臨床的、実験的成績から、卵巣内分泌機能不全が全身的要因の一つであろうと述べている。

本症に特に有効な全身的薬剤はなく、局所療法として僅に副腎皮質ステロイドが比較的有効とされているが、長期連用は副作用上問題がある。著者が初めて試みた Estrogen 軟膏療法はこれに匹敵する好成績を示した。

以上、本論文は口腔粘膜扁平苔癬を性腺内分泌機能の観点より追求し、よくその一面を捉えており、今後の本症の病因、本態、治療の解明に大きな示唆を与えた興味深いものであり、学位授与に値するものと認める。